

# 大力 九助 (きゆうすけ)

むかし、將軍がこの国を治めていたころのことです。

大府村中島に九助という百姓がいました。九助は、なかなかの働き者で、野良仕事のほかに、牛をひいて遠くまで米や塩を運ぶ牛方もしていました。仲間の衆からは、「九助よ」、「九助さ」と、かわいがられておりました。

ある日のこと、九助は、牛の背に三俵の塩をのせて、宮の宿まで行くことになりました。陽気はいいし、天気もいいし、九助は、牛の鼻綱をひいて鼻歌を歌いながら、東海道を進んで行きました。

ところが、宮の宿の手前のオンバコ橋にさしかかったときです。橋の向こうから、「下にい、下にい……。」

と、西国の殿様の江戸へ行く行列が、やってきました。

九助は、もう歌どころではありません。

「さあ困ったぞ、困ったぞ。どうしよう……。」



と、大あわてです。

いまにも、行列の侍から、

「無礼者。さがりおれ。」

と、どなりつけられるかと、ひやひやものです。道をゆずろうにも、せまい橋にはゆるる場所がありません。重い荷物を積んだ牛は、後へさがることができません。

行列は、だんだん近づいてきます。進むことも、もどることもできないで困りぬいた九助は、持っていた鼻綱を腕にまきつけ、牛の四つ足を両腕にかかえると、

「えいっ。」

と、カマかせに、塩俵を積んだままの牛を持ち上げました。九助は、頭上の牛をさらに、橋のらんかんから川の上に差し出しました。

牛を差し出した九助を見た人たちは、

「おお、あれはなんだ。どうしたことだ。」

「たいした力持ちじゃ。」

「すごい力だ。」

と、びつくりするやら、あきれるやらの大さわぎです。

駕籠を止めさせたお殿様は、

「あの者を呼べ。」

と、供ともの者にいいつけました。

無礼をとがめられるのかと、おそろおそろひざまずいた九助に、お殿様は、

「見事であつた。見事であつたぞ。」

と、おほめになり、数々のほうびの品をおくられました。

思いもしないほうびにあずかつた九助は、大喜びで村に帰りました。

このことは、世間で大評判ひょうばんになりました。人々の間で、

「大府の大力、大力九助。」

と、呼ばれるようになりました。

九助は、その後もあいかわらず、仕事せいに精を出していました。

大府地区に伝わる話です。大府村の中島は、今の中央町の南から朝日町の北にかけた辺りと思われます。

宮の宿は、東海道五十三次の一つで、名古屋市熱田区にありました。オンバコ橋は、「堀尾金助とその母」の話で知られる精進川にかかる裁断橋のことです。今、川はうめ立てられてしまいました。したが、橋は、当時の三分の一にちぢめられて残されています。

牛方の九助は塩を運送しています。古くは、知多半島の各地でも塩がつくられていたようです。